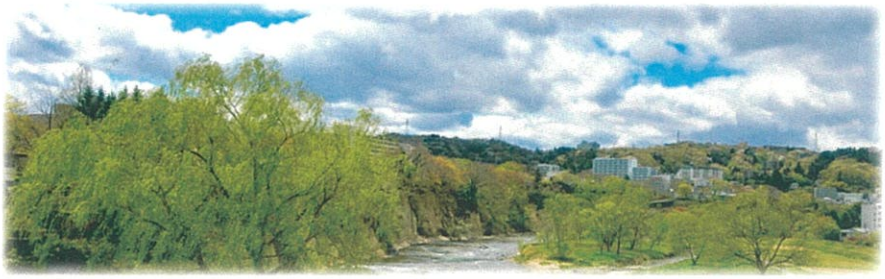
特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎ

15年のあゆみ

設立から解散まで（2004.10.14～2019.5.31）



目　次

「特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎ」15年の節目に

あいさつ …… 1

特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎについて

◆設立趣旨書 …… 1

◆特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎの概要 …… 1

◆「ふぁるま・ねっと・みやぎ」誕生のころ …… 2

◆１５年のあゆみ（活動一覧） …… 3

寄稿：15年のあゆみに寄せて …… 4

「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の思い出　元宮城県保健福祉部薬務課長　百川　滉 …… 4

「NPO法人ふぁるま・ねっと・みやぎ１５年のあゆみ」に寄せて …… 4

宮城県保健福祉部薬務課長　安藤京子 …… 4

「PNMの精神は永久に不滅です」　宮城県薬剤師会顧問　生出泉太郎 …… 4

ふぁるま・ねっと・みやぎの活動に寄せて　宮城県薬剤師会長　佐々木孝雄 …… 4

地域の薬剤師が取り組むセルフメディケーションのあり方

仙台市薬剤師会長　北村哲治 …… 5

PNMに感謝を込めて　会員・元監事　八木沼和子 …… 6

ふぁるま・ねっと・みやぎ15年のあゆみに寄せて　会員　伊藤みどり …… 6

SDGｓの先端を行くPNM　東和薬局薬剤師（岩手県花巻市）武政文彦 …… 6

心強い伴走相手　河北新報社富谷支局　藤田和彦 …… 7

重要な「薬の専門家」による啓発活動　薬事日報社編集局　池田信夫 …… 7

PNMの活動を振り返って …… 8

ふぁるま・ねっと通信 …… 8

出前講座 …… 8

スキルアップ研修会 …… 9

いろいろセミナー「学びナイト」 …… 9

薬食研究会 …… 10

助成・委託事業 …… 10

アンケート調査 …… 11

地域連携イベント（村田町） …… 11

周年記念イベント …… 12

薬剤師等対象セミナー（OTC薬、保健的食品） …… 13

日本薬剤師会学術大会 …… 14

報道記事（河北新報・薬事日報） …… 16

薬学生教育の一環として …… 16

東北大学薬学部講義 …… 16

東北薬科大学生への講義 …… 16

薬学生によるOTC薬購入体験調査 …… 16

役員から …… 17

理事 …… 17

監事 …… 18

「特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎ」15年の節目に

ごあいさつ

理事長　戸田紘子

特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎは、2004年10月に設立して以来、15年の年月を過ごして参りました。この間「医薬品や健康への効果を期待して用いられるさまざまな食品（保健的食品と称す）で健康被害を起こしてはならない」という基本理念のもとに、とくに保健的食品の正しい情報と適切な使用法などを伝えてきました。2011年3月の東日本大震災を経験してあらためて健康に生きることの大切さを感じ、健やかに生きるためのセルフメディケーションを進めるお手伝いにも力を入れてきました。その後2015年4月にスタートした「機能性表示食品」制度の内容と行方を見守り、適切な情報を生活者に届けるために、設立時に掲げた「保健的食品の正しい情報を伝える」という視点に立ち返り、さらに進化した情報発信を目指しました。「特定保健用食品」「栄養機能食品」「機能性表示食品」と法的には整備された食品制度がうまく機能することを願っておりましたが、実際に世間に出回っている商品の宣伝においては、食品に許された区別や表示範囲を超えた表現に歯止めがかからない状況となっており、結果として、安全性が確認できないものや消費者の誤認を招く商品が世に出てしまっています。

このような状況にあって、「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の目的達成はまだまだ道半ばですが、諸般の事情から法人格を持った非営利活動団体を解散する決断を致しました。今後は新たに立ち上がった任意の非営利活動団体に「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の精神と無形の財産を託すことになりました。

会員の皆様をはじめ、設立から今日まで支えてくださった多くの関係者および地域のみなさまに、心から感謝申し上げ、15年の節目のごあいさつとさせていただきます。

2019年5月

■特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎについて

◆設立趣旨書

【設立までの経過】

最近出回っている「機能性が期待される食品（便宜的に保健的食品とよぶ）」については、薬剤師として生活者に提供できる科学的なデータが乏しく、適切なアドバイスを行うことが難しいのが実情です。

この様な状況のなか、世間に氾濫している情報の真偽を見きわめ、科学的なデータを収集して、適切な情報を提供しようという趣旨で、2002年8月、「みやぎ・薬剤師・保健機能食品・健康食品研究会」を立ち上げました。この間、市民講座での講演等もおこなってきましたが、得られた情報や知見について、もっと広く一般に提供すべきではないかと思うに至りました。

また、進歩の著しい医薬品や多種多様な保健的食品について、薬剤師は日々研鑽を積まねばなりません。

時間的地理的な理由で、薬剤師会等が主催する研修会などへの参加が困難な場合も多いことから、地域的な小グループによる研修会等を望む声もあり、これまでに個人的な立場で資料の提供や講師を努めてきた経緯もあります。この様な活動を、より明確な責任ある立場で実施し、医薬品や保健的食品の適切な使用を支援したいと考えました。

【設立】

健康で質の高い生活を送ることは国民的な願いであり、国も「21世紀における国民健康づくり運動」を進めています。健康の維持および病気の軽治療については、適切な食生活と市販薬などの使用により、自分の健康を自ら守ること(セルフメディケーション)が第一に必要なこととされています。セルフメディケーションが適切に行われるためには、正しい知識や情報が不可欠ですが、医薬品が複雑化し、保健的食品が氾濫している現在、正しい情報を得ることはかなり難しい状況にあります。

行政や薬剤師会等の関係機関は広報や健康イベントなどにより啓発活動をおこなっておりますが、広く浸透しているとは言い難い状況です。よりきめ細かな且つ正確な情報提供の一助となることを目的として、

特定非営利活動法人「ふぁるま・ねっと・みやぎ」を設立しました。

2004年6月28日

◆特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎの概要

☆設立の経緯

＊1990～2000年・健康食品急成長時代・新聞折込公告全盛期・健康食品情報虚偽誇大
　・薬剤師も参入

＊医薬品を扱う薬剤師の関与が必須（相互作用など）であるが、薬剤師会の中に健康食品を扱う部門はなかった

＊薬剤師有志による薬食研究会「まっしゅる～む」立ち上げ、2年半の準備期間を経て、医療福祉分野第4番目のNPO法人として2004年10月に宮城県知事の認証を受けた

＊設立時のMember

井上昭吾、及川雪子、金田早苗、今野勇、櫻井裕子、鈴木一正、鈴木洋子、戸田紘子、富永敦子、

山本豊、山木美可子

☆**活動の基本理念**

＊医薬品や、健康への効果を期待して用いられるさまざまな食品（保健的食品）で健康被害を起こさせない

＊少子高齢社会を健やかに生きるためのセルフメディケーションを支援する

＊地域コミュニティにおける多職種連携を支援する

＊薬剤師が活動の中心となる

☆**活動：医薬品や保健的食品の不確かな情報や利用法に目を配り、出前講座・研修会・公開イベントを通じて適切な情報を伝えていく**

☆**活動内容：活動は三つの部門でおこなう**

◆情報・出版

・情報紙「ふぁるま・ねっと通信」の発行・医薬品・食品関連の書籍・冊子類の発行

・ホームページ上での情報提供：健康雑学講座、話題の食品・得2情報、健康情報Q&A

◆教育・研修

・出前講座での講演など・スキルアップ研修会開催・いろいろセミナー開催

・OTC薬および保健的食品関連セミナー開催

◆調査・研究

・薬食ビジランp-net（健康被害等の情報収集・監視）・社会的課題の研究・調査

☆**解散時の理事・監事・委員等**

理事：戸田紘子、富永敦子、今野勇、金田早苗、平澤典保、庄子郁子

監事：佐藤進、吉澤順一　　委員：辻順子

顧問：山本豊、坂本尚夫　　相談役：山木美可子、井上昭吾

◆「ふぁるま･ねっと･みやぎ」誕生のころ

特定非営利活動法人「ふぁるま・ねっと・みやぎ」設立（2004年10月）前後の時代は、80年代からの国民の健康志向の高まりに加え、インターネットによる個人購入、厚労省主導の健康意識向上を目指した法整備により健康産業の絶頂期を迎えていました。新聞折込公告全盛期でもあり、虚偽誇大・玉石混淆の健康食品情報を目にし、薬学・科学を学んできた薬剤師としてある種の焦りを感じていました。健康食品といえども薬理作用を持つ可能性がある以上、薬剤師の関与が必須（相互作用など）であろう。しかし、薬学教育の中では健康食品やその成分について学んではおらず、なんのエビデンスも持ち合わせていなかった。そればかりか薬剤師もこの健康食品ブームに参入していたのです。当然ながら薬剤師会の中に健康食品を扱う部門はありませんでした。

このような状況の中、宮城県薬剤師会職域部会からの声がけで、「健康食品の現状」について話をし、薬剤師として取り組もうと呼びかけました。このことが後の「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の前身となる薬食研究会「まっしゅる～む」の立ち上げにつながりました。この課程で強く私の背中を押してくれた方がいらっしゃいました。職域部会での私の話をお聴き下さった元宮城県薬務課長の千葉規先生です。

「このことは本当は薬剤師会がやらなければならないこと。しかしできないと思う。難しいだろうけど頑張って」この言葉をずっと背中に感じながら、思いを同じくするメンバーと共に前述の薬食研究会（みやぎ・薬剤師・保健機能食品・健康食品研究会）を経て特定非営利活動法人「ふぁるま・ねっと・みやぎ」設立に至りました。千葉先生は会員第1号となって下さり、当時関わっておられた会社を退いたら活動にも参加すると言われていたのですが、残念ながら一度のご参加もないままに、11年3月の津波の犠牲になられました。15年間の心残りのひとつです。

誕生にまつわる話でどうしても欠かせない方についても触れなければなりません。私が県薬の役員をやめてNPO法人を立ち上げたいと言ったとき、当時の生出泉太郎会長は「本当は薬剤師会でやることだけど、今はできない。今後は閣外協力ということでやっていきましょう」といって下さり、折に触れ連携という形で育てていただいたと思っております。それからもう一方、私が東北大医学部薬学科4年生で薬化学教室に配属になったときの「教育係」だった山本豊先生（東北薬科大学名誉教授）。卒業後も教室の兄貴分としてなにかとお世話になっていた私が、NPO法人の立ち上げを相談したとき、たぶん「仕方のないやつ」と思いつつも受け止めて下さって、ゼロからのHP立ち上げなどのご苦労もおかけしました。先生のお弟子さん達が活動のコアメンバーになって下さったことも大きかったです。

また、NPO法人として活動するうえで欠かせないのが拠点となる事務所です。資本金ナシでの誕生でしたから自前の事務所など持てる筈もなく、個人や企業の会員さんにお世話になりました。特に、（同）風樹の杜様、（有）リトルバード様には会議や研修会などの会場提供および事務機能の支援をいただきました。

このように、会員の皆様をはじめ、宮城県薬務課、薬剤師会、出前講座に呼んで下さった自治体や企業の皆様にお力添えをいただきながら15年を精一杯過ごすことができましたこと、ただ感謝あるのみです。

戸田紘子

◆15年のあゆみ（活動一覧）（2004 ～ 2019）

年　月　日	主　な　活　動	内　　容
2002.7 ～ 2003.12	みやぎ・薬剤師・保健機能食品・健康食品研究会	愛称:薬食研「まっしゅる～む」として法人設立の母体となった
2004.06.28	特定非営利活動法人設立準備	設立総会
2004.10.14	特定非営利活動法人設立	特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎ（PNM）として知事の認証を受ける
2005.09.18	PNM設立1周年記念事業	公開フェア「上手に使おう薬と食品」仙台戦災復興記念館　展示ホール
2007.11.10	PNM設立3周年記念事業	公開フェア「健康食品うそ・ほんと」仙台戦災復興記念館　展示ホール
2009.6.26 ～ 27	PNM設立5周年記念事業	公開フェア「健康食品による健康被害を防ごう」、健康被害電話相談仙台戦災復興記念館
2011.10.30	PNM設立7周年記念事業	公開フェア「健康に生きるために」仙台メディアテークオープンスクエア
2015.02.08	PNM設立10周年記念事業	公開フェア「セルフメディケーション時代を上手に生きる」　仙台戦災復興記念館
2015.02.08	平成26年度薬局・薬剤師を活用した健康情報拠点推進事業（宮城県委託）	宮城県とPNMとの共催
2015.11.15	平成27年度薬局・薬剤師を活用した健康情報拠点推進事業（宮城県委託）	地域包括ケアシステム構築に向けた多職種連携の試み：「健康ふくし祭INむらた」との共催
2019.01.06	PNM設立15周年記念事業	公開フェア「ふぁるま・ねっと・みやぎからの贈りもの」　東北電力アクアホール

主　な　事　業	対　象（依　頼　者）	内　　容
通信紙の発行（情報提供）	一般	ふぁるま・ねっと通信創刊号～第50号トピックス、紙上健康講座、話題の食品
出前講座（講師派遣）	一般（保健・健康関係行政等）	健康、薬、保健的食品　54回
	学生・生徒（大学・高校・中学校）	薬局・薬剤師、OTC薬、セルフメディケーション、保健的食品　15回
	医療関係者（医師会、薬剤師会）	保健的食品、禁煙、OTC薬　8回
	行政関係者（行政）	医薬品、保健的食品　4回
研修会（主催）	薬剤師、医師、保健師他	スキルアップ研修会　37回
	薬剤師、登録販売者	OTC薬学セミナー　48回
	薬剤師、登録販売者	保健的食品セミナー　2回
	薬剤師、他職種	いろいろセミナー　29回
	薬剤師、他職種	薬食研究会　9回
医薬品・食品の情報収集と市場実態調査	薬剤師	薬食ビジランP-net調査　5回
	一般応募者	保健的食品広告・宣伝の実態調査
	医師・薬剤師（アンケート）	保健的食品の使用実態および健康被害情報
出版・資料作成	一般	啓発用冊子　4種
	薬剤師	禁煙指導法、OTC薬、保健的食品　3種
	薬剤師・登録販売者	各種研修資料
インターネットによる情報提供	ホームページ公開	活動状況、医薬品・保健的食品を正しく使うための情報（Q&A、解説、うそ・ほんと情報）
講師等の養成・派遣	学会発表・出席・講師派遣	日薬学術大会（10回）　他10回
他団体イベント後援・出展・出席	宮城県薬剤師会、禁煙みやぎ他	薬と健康のつどい、禁煙フォーラム　他35回

■寄稿：15年のあゆみに寄せて

（敬称は省略させていただきました）

「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の思い出

元宮城県保健福祉部薬務課長　百川　滉

私が「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の戸田理事長さんにお会いしたのは、今から約15年位前の確か平成16年の薬務課長時代だと記憶しております。

今の県庁舎平成元年5月から使用されておりますが、当時私は薬事温泉係長でした。

この頃は、食品の中に医薬品でないのに薬効・効果を標榜し薬事法（現医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律）違反が非常に多いときでした。薬事監視員としては薬局等の監視の目的の一つに健康食品の監視も必要な時期でもありました。又、平成16年10月に特定非営利活動法人「ふぁるま・ねっと・みやぎ」が設立された頃は、薬務課では、温泉の偽装問題やダイエット用健康食品や薬事法未承認未許可医薬品による事件・事故が多発しており、その調査等に多大な時間が費やされた時期でもあり、とくに健康食品が大きな社会問題になっておりました。そのようなときに設立された団体の公開フェアにも何回か参加させていただきました。特に記憶にあるのは、平成19年11月10日の設立3周年記念事業の公開フェアに参加し、その後の懇親会まで出席させていただき、東北大学客員教授の坂本先生と少しお話しさせていただいた記憶がございます。その後は、宮城県を平成19年3月で定年退職してから12年にもなります。現在も民間の薬局の薬事関係のお手伝いをさせていただいており、今でも薬局内で販売されている健康食品等の広告には気を遣っております。「ふぁるま・ねっと・みやぎ」も15周年を迎える時、残念ながら法人としての活動を閉じることになったとお聞きしましたが、これからも非営利団体として活動するということでもあり、貴団体が果たす役割はこれからも大きいものと確信しており、今後のご活躍をご祈念申し上げます。

「NPO法人ふぁるま・ねっと・みやぎ15年のあゆみ」に寄せて

宮城県保健福祉部薬務課長　安藤　京子

「特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎ」さんの15年に及ぶ活動に、改めて敬意を表します。これまで貴法人には、「医薬品や健康への効果を期待して用いられる所謂『保健的食品』による健康被害を起こしてはならない」という基本理念の下に、研修会やセミナー、あるいは「ふぁるま・ねっと通信」の配信等様々な事業を通じて、県民に対し適切な情報を発信していただいております。

戸田理事長を始め、各界の会員皆様のお力により、「薬と食品」の上手な使い方や「健康食品による健康被害」という視点での公開フェアの開催等、あくまでも生活者の側に立ったわかりやすい内容で啓蒙いただいており、行政としても感謝に堪えません。

国は2014年に日本再興戦略を改訂し、その中で超高齢社会に備えるため「健康寿命の延伸」を謳い、個々の「セルフメディケーション」が必要だという方向性を示しました。当然の事ながら、薬剤師そして薬局もその一翼を担うべく位置付けられ、平成26年度から始まったのが、「薬局薬剤師を活用した健康情報拠点推進事業」です。「ふぁるま・ねっと・みやぎ」さんにも、平成26・27年度と事業に取り組んでいただきました。初年度は、貴法人「設立10周年事業」と連携し、会場に巨大な「模擬薬局」を据え、来場者に参加いただきながらセルフメディケーションについて体験いただく等、画期的な取組を展開していただきました。また翌年は、「健康ふくし祭りinむらた」において、町の保健師に薬剤師・薬局の役割を周知しつつ、近隣の薬局との連携も取りつけながら町民の健康相談等に対応され大いに好評を博したと伺っております。村田町のように、薬局が何軒も無く、町民の身近かな存在になっていない環境下での地域包括ケアシステム構築に向けた多職種連携の試みは、当時未だ珍しく新たな連携のモデルとして注目されました。

大所高所から、薬剤師の社会的な役割や立ち位置が問われる昨今ですが、随分前から、薬剤師本来の職能を発揮すべく「ふぁるま・ねっと・みやぎ」というNPO法人を立ち上げ、束ねながら社会貢献されてきた戸田先生のリーダーシップには敬服しております。貴法人の意思が何れかの形で引き継がれ、今後とも県の薬事行政にもご指導ご協力いただけることを切に願い、寄せる言葉とさせていただきます。

PNMの精神は永久に不滅です

宮城県薬剤師会顧問　生出　泉太郎

戸田紘子先生が、かつて宮城県薬剤師会医薬品試験センターに勤務していたことをご存知でしょうか。推測ですが、恐らくそのような関わり合いがあることから、2000年から宮城県薬剤師会理事に就任、広報部や医薬品試験委員会、薬と健康の週間実行委員会を担当されておりました。その後、2014年に私が会長に就任した時からは、常任理事として学術部、広報部などを担当してご活躍いただきました。

当時、戸田先生ご自身がドラッグストアの店頭に立たれていた経験から、OTC医薬品やいわゆる健康食品などが生活者の勝手な判断で購入されている実態に気づき、孤軍奮闘しながら正しい使い方についての啓発活動を行っていたと記憶しています。このような経緯から「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の前身である薬食研「まっしゅる～む」の活動が始まりました。同時に、禁煙活動にも積極的に取り組んで

おり、当時愛煙家だった私に「会長を禁煙させることが私の使命」と何度も口うるさく言われたものです。お陰様で、今はすっかり煙草との縁を切ることができました。

さて、2002年に中国製ダイエット用健康食品を利用していた女性が重篤な肝障害で死に至るという事件が起こり、同様な健康被害が次々と明らかになりました。これらの事件の背景には、生活者の「薬は副作用があるから怖い。だけど、健康食品は食品だから副作用がない。」という誤った認識があり、TVなどのCMで、あたかも病気が治るかのような宣伝がなされていることが健康食品等の利用に拍車をかけています。さらに、2015年から食品の機能性表示が認められたこともあり、いわゆる健康食品やサプリメント等の市場が拡大しています。

2004年にスタートした特定非営利活動法人「ふぁるま・ねっと・みやぎ」は、本来、薬剤師の職能団体である薬剤師会が取り組まなければならない、このような問題に対して、時代を先取りした健康づくり活動に取り組んでいます。

他には、改正薬事法（現薬機法）への取組みなどについても側面からサポートしていただいており、今後、任意団体に移行されましても「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の精神は永久に不滅です。

ふぁるま・ねっと・みやぎの活動に寄せて

宮城県薬剤師会長　佐々木　孝雄

NPO法人ふぁるま・ねっと・みやぎ（以下PNM）は、保険調剤が最も急成長を遂げた平成の半ばに誕生しました。世の中、猫も杓子も調剤調剤。一般用医薬品など見向きもされない時代に一石を投じたのがPNMでした。処方薬と一般用医薬品との一元管理を目指して病院を飛び出した私でしたので、戸田先生の思いには共感するところもたくさんありました。また、今でこそセルフメディケーションへの取り組みの必要性が声高に叫ばれておりますが、あの当時の先生の発想と行動力にはただただ敬服いたしておりました。私の場合、処方薬と一般用医薬品との一元管理が主目的でしたが、戸田先生は薬以前のアプローチも大切にされており、薬に頼らない健康維持に関する情報提供にも取り組まれておられていたことには脱帽しておりました。

セルフメディケーションへの取り組みはその本来的な目的以外にも、次の2つの点で極めて重要であると思います。まず、一般用医薬品等と処方薬との一元的な服薬管理を実現することで、薬物療法の整合性の担保が可能になります。また、このことは単に薬の交通整理にとどまらず、来局者の体調変化を薬剤師が把握することで、その体調変化と服用薬の関連性を考察し、余分な薬の使用を回避したり、あるいは相談者自身が気付いていない重症疾患や薬の副作用を早期に発見することが期待できます。

もう一つは、相談者との一連の対話を通じて、薬剤師の職能を実感していただけること。昨年行われた、厚労省厚生科学審議会・医薬品医療機器制度部会において、薬剤師が本来の役割を果たしていない、などといった極めて遺憾な取り纏めがなされましたが、この背景にも薬剤師の職能が社会に理解されていない、ということがあると思います。

このように、セルフメディケーションへの取り組みは今後ますます重要性を増してくるものと思います。戸田先生のさらなるご活躍とご健康をご祈念申し上げます。

地域の薬剤師が取り組むセルフメディケーションのあり方

仙台市薬剤師会長　北村　哲治

薬剤師の夢であった「医薬分業」は、今や70%を超え成熟期に達しましたが、当時の薬剤師の望んだ形態から大きくかけ離れてしまったのではないでしょうか。現状の薬局・薬剤師の仕事の多くは、保険調剤が中心になり、地域住民へのセルフメディケーションの普及、推進は忘れられています。

セルフメディケーションと言えば、OTC薬やサプリメントの販売と思う薬剤師も多く、同時に関心も少ないのだと思われます。もちろん処方薬とOTC薬、サプリメントの飲み合わせ等に関しては、服薬指導の中で十分助言をされていることでしょうが、セルフメディケーションは個人々の健康に関する自己管理です。そこには疾病予防や未病への対応も含まれることから、もう一歩踏み込み地域の人々への健康管理に関してアドバイスをすることも薬剤師の仕事ではないでしょうか。また、薬剤師の職能として調剤（調剤技術、服薬指導等）以外に環境衛生管理も薬剤師の役割です。在宅医療が増え、薬剤師の在宅訪問も増えてきていますが、訪問時に処方薬の服薬指導だけに終わらず、患者やその家族の衛生管理についても積極的に助言することが必要と思われます。これもセルフメディケーションの推進の一つになると思います。このように販売に拘らず、地域の人々への相談、助言、アドバイスも地域の薬剤師が行うセルフメディケーションの推進活動ではないでしょうか。これからの薬局のあり方として、調剤とセルフメディケーショへの関与が、並列されることが望まれます。

今、地域包括ケアシステムの構築が叫ばれております。地域包括ケアシステムは、疾患を持った人々を地域で見守ることだけでなく、疾病予防や未病への対応も含まれております。そこに薬剤師の活躍する場が必ずあるはずです。保険点数や物品販売から離れて、広く「薬剤師使命」を考え、薬剤師がもっと地域輪の中に入ることによってセルフメディケーションの普及、推進に寄与するのではないでしょうか。これからの時代こそ「NPO法人ふぁるま・ねっと・みやぎ」が推進されてきた「セルフメディケーション」が必要と思われます。誠に残念なことですがこの度、同法人は解散されますが、この15年の活動の精神は、次世代へと引き継がれ、これからの薬剤師の指標となることでしょう。

PNMに感謝を込めて

会員・元監事　八木沼　和子

今回、活動の歩みの発刊に際し「ふぁるま・ねっと・みやぎ」が15年にもわたり活動を続けてこられたことに対して、改めて尊敬の念を抱いております。NPO法人としてのお働き、本当にお疲れさまでございました。また個人的には少しの間でしたが関わりを持たせていただき、現役を離れた私が皆さまとお知り合いになる機会をいただきましたことに感謝を申し上げます。

特に熱意をもって進められた延べ116回に及ぶ研修会開催は、薬剤師の方々に大いに刺激を与えたことと思いますし、また81回の出前講座、6回の公開フェアは、広く市民の方々にこの法人の設立趣旨を伝えられた素晴らしい場になったことと思います。

先日、雑誌『ナショナルジオグラフィック』の1月号「未来の医療」という特集号を読みました。そのなかに「お宅の薬、見せてください」という面白いコーナーがあり目に留まりました。そこには、家中からひっぱりだされた処方薬の袋、OTC薬の箱、サプリの瓶など様々な「薬」が、ずらっと並べられた部屋で住人が笑顔で写っている写真の数々が載っていました。なかには、やたらとサプリの多い国もありましたし、ほとんどが生の植物の葉やハーブという国もありました。世界各国、各家庭にはこんな数のお薬が常備されているのかと驚き、本当にその国の医療事情も映し出されているように思いました。

「知っている」か「知らない」か、ということは何事の決定においても重要なポイントだと思いますが、情報が氾濫している現代においては「正しく知る」ことの難しさを痛感いたします。この法人設立の柱は…健康に良いことと信じて摂取したあげく不健康になることの愚…それを防ぐ願いであったことと思います。そして現役の薬剤師の方々の正しいアドバイスこそが、市民の皆さまの救いとなるはずだと思います。そのためにも益々のご活躍、そして何より諸先生方のご健康長寿を心よりお祈りしております。

ふぁるま・ねっと・みやぎ15年のあゆみに寄せて

会員　伊藤　みどり

ふぁるま・ねっと・みやぎ設立15周年、おめでとうございます。

理事長の戸田紘子先生はじめ、多くの先生方の熱意、ご尽力により、15周年を迎えることができたのだと思います。

ふぁるま・ねっと設立当時、薬剤師が薬局外で活動を行うのは在宅業務くらいで、患者さんのみならず一般市民に対し、直接薬剤師が情報を発信する、といった機会はあまり無かったように思います。ふぁるま・ねっとのその姿勢に感服し、それ以来会員として私も公開フェアなどに参加させて頂くようになりました。現在は健康サポート薬局も増えつつあり、各薬局では地域住民に対するイベントを企画するなど、地域住民と薬剤師の距離も近くなっているように感じますが、ふぁるま・ねっと設立当時は、薬剤師主体のイベント開催はまだ珍しかったのではないでしょうか。

ふぁるま・ねっとでは、健康食品の安全性や有用性について熱心に啓蒙活動を行っていますが、私自身はふぁるま・ねっとから、喫煙の有害性、禁煙の有用性についても、多くのことを学ぶことができたと思っております。実際、ふぁるま・ねっとからは、OTC薬を用いた禁煙指導の実践マニュアルが出版されており、私も利用させていただきました。喫煙者は減少傾向にあるものの、加熱式タバコのシェアは年々増えており、禁煙の代替手段として加熱式タバコに変える人が多いそうです。本当にそれが禁煙へ繋がる道なのか??薬剤師が適切に介入することで、禁煙への道がより短くなるのではないかと思います。

特に保険薬局の薬剤師の場合、処方箋を持参した患者さんとの接点はあっても、それ以外の地域住民との接点はまだ少ない状況です。町の科学者である薬剤師として、その知識を地域住民に還元するためには、処方箋薬以外の健康食品やOTC医薬品、禁煙支援等について、もっと我々自身が興味を持つ必要があるのではないかと思います。ふぁるま・ねっとをきっかけに、薬剤師自身のスキルアップや薬剤師が能動的に情報を発信していくことの重要性が理解され、更に多くの方々にふぁるま・ねっと・みやぎの活動趣旨が拡がることを願っています。

SDGsの先端を行くPNM

東和薬局　薬剤師（岩手県花巻市）　武政　文彦

限りなき経済成長が人々を幸せにする、という幻想が破綻しつつある。今世界の国々は、極端な欠乏と不平等をなくし、同時に破滅的な過剰を抑制することによって持続可能な社会をつくる開発目標（SDGs）に取り組んでいる。この時期（前身であるミレニアム開発目標は2001年～）と内容にふぁるま・ねっと・みやぎ（PNM）の活動が符合している。偶然か必然か。ともかくも、17の国際目標のうち少なくとも4つのゴールがPMNの活動に一致している。第1に「保健」（すべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進）である。一貫して取り組んでいる「医薬品や健康目的の食品で健康被害を起こしてはならない」という目標は、かつて私たち薬剤師が防ぎえなかった薬害という重い事件をふまえ、「加害者には2度となるまい」とした決意に通じる。第2に「教育」（すべての人に～生涯学習の機会を）。PMNは頻繁に公開フェアや研修会を開いてきた。驚いたのはその多彩な内容である。健康

落語あり、ワークショップあり、実に楽しい。「あらゆる」年齢の「すべての」人々を巻き込むにはこうでなくてはならない。そして「ジェンダー」（すべての女性及び女児の能力強化）である。会の主要メンバーは女性。しかもよくしゃべる。しゃべりながら自分の考えを相手に伝え、相手の考えを吸収していく。まさにコミュニケーション=薬学だ。そして「平和」（持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進）。活動には表立って平和のアピールがあるわけではない。しかし教育や福祉の予算を削って軍事費拡大に走る政治への批判が、PNMの通奏低音として流れていると私は感じている。本来、PNMのような活動は国がもっと積極的に取り組むべき事柄ではないか。あまりにも貧弱な国の対応に業を煮やして立ち上がった戸田先生と同僚の方々の今後に期待したい。及ばずながら私もお手伝いできればと思っている。

心強い伴走相手

河北新報社富谷支局　藤田　和彦

2004年の設立から15年の時を刻み、法人格を持った団体としての活動に終止符を打つと伺いました。惜しい気持ちもいたしましたが、「保健的食品」との付き合い方について長く啓発活動を続けてきたことにずっと敬意の念を抱いており、今は心より「お疲れさまでした」との言葉をお贈りしたいと存じます。

「サプリ社会を診断」。2007年1月5日、河北新報朝刊1面に載った長期連載「健康食品のカルテ」第1回の見出しです。当時、当社生活文化部で医療・健康分野を担当していた私は取材班に加わり、この日から6月29日まで、全26回にわたって健康食品やサプリメントの利用実態や健康被害の現実、健康情報の読み解き方などを紹介しました。

健康食品が市場を席巻し、「がんが消える」などと真偽の不確かな情報も飛び交っていた時代です。「科学的根拠に基づく正しい知識を知ってほしい」と薬剤師有志が立ち上がり、市民向けに出前講座などを始めたのが「ふぁるま・ねっと・みやぎ」でした。「健康をもたらすべき医薬品や保健的食品で健康被害を起こしてはならない」。こう基本理念に掲げたふぁるま・ねっと・みやぎの活動は、専門家ならではのクールな視点と健康被害防止に燃える熱い情熱に支えられたものでした。

問題意識こそ共感していたものの、専門知識や利用現場の実情に疎い当方にとってはロングラン取材の伴走相手ともいうべき心強く頼りになる存在でした。協力をいただいた成果は、連載の中で「サプリライフ/高齢者、心と体のすき間に」「健康被害/『治療効果』潜む危うさ」「誇大広告/被害の温床改善進まず」といった見出しで伝えることができました。

連載後もお付き合いは続いています。問題ありと疑われる健康食品広告を市民ボランティアの協力で広く収集して事例報告する活動や、地域の保健室としての薬局の在り方を探る企画などを取材させていただきました。利用者の視点に立った実践的な活動が特徴的で、毎回、深く共感しながら記事を書いた思い出があります。

命を支える「健康」は奥深く、また広がりもあるテーマです。「ふぁるま・ねっと・みやぎ」がまいた種が育ち、実りますよう、今後の活動にもご期待したいと思います。これまでいただいたご協力に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

重要な「薬の専門家」による啓発活動

薬事日報社編集局　池田　信夫

医薬品や健康食品、サプリメント等の正しい情報や利用法を提供していこうと、主に薬剤師が中心となってNPO（特定非営利活動法人）を立ち上げたことを聞き、初めて取材をさせていただいてから、早いもので13年余りが経過しました。その後もイベントなどの活動を何度か紹介し、今年1月の「設立15年記念のつどい」も拝見しましたが、いずれも熱心な参加者が多く詰めかけているのが印象的で、「ふぁるま・ねっと・みやぎ」が地域の人々の健康意識の改善に、確実に貢献してきたと言えるでしょう。

日常的に口にする「健康食品」という言葉は、当時から法律では存在しておらず、特定保健用食品（トクホ）や栄養機能食品に加え、新たな「機能性表示食品」制度も加わり、各種アンケート調査などを見ても、明確に違いを認識している消費者は少ないのが現状です。一方で、小売店頭や通信販売では多数の商品が販売され、ちょっと知識をかじった者でも選択に戸惑うのが正直なところでしょう。

健康を願う気持ちが強いがゆえに、サプリメント等を目安量以上に過剰に摂取してしまい、かえって健康を害する人もいます。また、そういう気持ちに便乗して問題のある表現で広告宣伝する商品も中には存在します。「設立15年記念のつどい」での戸田理事長の記念講演は、まさしく少子高齢化社会を健やかに生きるための貴重なアドバイスでもありました。

「ふぁるま・ねっと・みやぎ」のスタッフの多くは、製薬企業や病院、研究所、保険薬局などに勤務されてきた医薬品の専門家であり、薬剤師の視点からの消費者啓発に向けた情報提供活動は、今後も間違いなく地域の人たちの力強い存在となるはずです。スタッフの皆さんは日常業務を持っている上での活動のため、イベント等の開催には（口にできない）苦労も多々あると存じますが、まずは15年を一つの区切りとして、新たな形での消費者支援の取り組みを願う次第です。

■PNMの活動を振り返って

ふぁるま・ねっと通信 ・・・医薬品や食品、生活に関わる正しい情報発信を目指して

多様化した社会の中で健康的に暮らしていくには自分の身体を知ること、次に、衣・食・住の環境を整える必要があります。

しかし、不正確な情報によって、被害が後を絶ちません。そこで、医薬品や食品、生活に関わる正しい情報を伝えてきました。年4回程度の発行で、通算50号に近づいてきましたが、紙上講座についてまとめてみましょう。

① 保健機能食品（4回）
② 健康食品による健康被害（3回）
③ 健康被害に合わないために（14回）
④ 統合医療について（8回）
⑤ 食中毒予防（4回）
⑥ 生活習慣病予防（12回）
⑦ 女性の健康づくり（4回）

特に健康被害と生活習慣病の予防に着目をし、くどいようですが、健康食品は医薬品と違い、品質の均一性や科学的根拠が少ない、安全性にも問題があるといった内容でまとめています。また、生活習慣病については、最近の国民健康・栄養調査の結果などでも同様に、女性のやせの課題があり、健康日本21では若年女性の骨量の減少、低出生体重児出産のリスク等の関連性も示されています。また、睡眠について40代が1日の平均が6時間未満の割合が男女とも高く、休養がとれていない結果です。もう一度、ふぁるま・ねっと通信を読んでみましょう。

今野　勇

出前講座 ・・・講座は大繁盛でしたが…

ふぁるま・ねっと・みやぎの活動の中心に位置づける「出前講座」は、各地域の高齢者から中学生まで広い地域と年齢層を対象に実施しました。

・各地の保健センター、市民センターなどで開催された一般市民向けの講座が54回（内容:健康、薬、保健的食品など）
・大学、高校、中学校で15回（内容:薬局・薬剤師、OTC薬、セルフメディケーション、保健的食品など）
・医師会や薬剤師会など医療関係者向けに8回（内容：保健的食品、禁煙、OTC薬など）
・行政関係者向けに4回（内容：医薬品、保健的食品など）

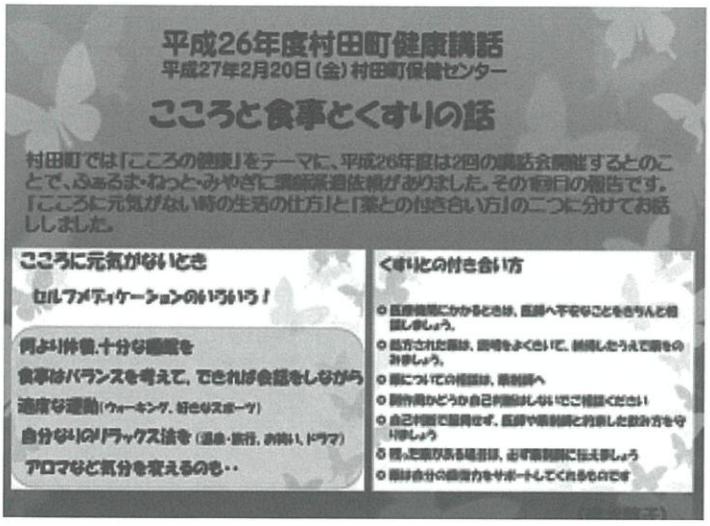
市民の「健康に生きたい」という気持をサポートしたいという思いで各地を廻りましたが、保健センターなどの担当者の熱心な取り組みに感服し、熱心に耳を傾けて下さる地域の皆様の健康への関心の高さに驚いたものです。しかしこの活動において「健康食品」が高齢者の生活の中に深くはいりこんでいる状況をあらためて知ることになり、悩み迷っている人々の姿に胸が痛みました。

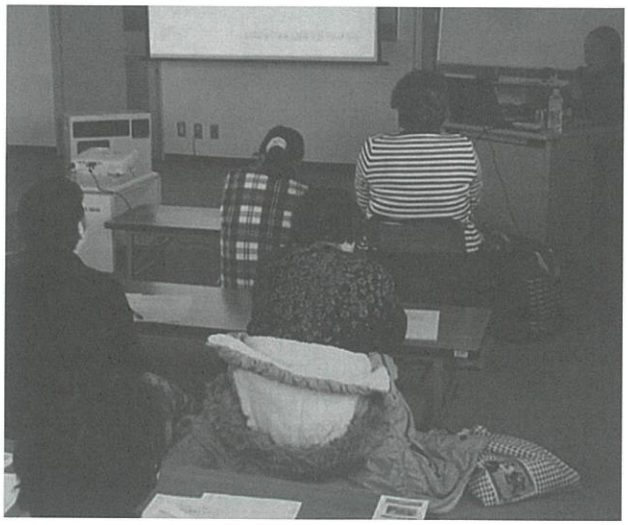
そして若い人たちに対するしっかりした健康教育、自立した健康管理の必要性を伝えることの重要性も強く感じました。これからもエビデンスに基づいた情報を伝え続ける人が増えてくれることを願っています。

数多くの出前講座の中で特に印象に残るのは、村田町保健センターからお声がけいただき、2015～2016の2年に亘って4回の健康講話でお話しさせていただいたことです。村田町の継続的な取り組みが成果を上げていることがわかりました。このご縁で、村田町包括支援センター、大手企業のOB会での講演、そして村田町「健康ふくし祭INむらた」との連携で町を挙げてのイベントに参加することができました。ふぁるま・ねっと・みやぎの活動の中でひとつのモデルになりました。

このイベントは宮城県の委託事業の一環として実施されたことも特筆すべきことでした。関係者の皆様ありがとうございました。

戸田紘子





スキルアップ研修会 ・・・スキルアップ研修会で学んだこと

スキルアップ研修会は医薬品や保健的食品に関して、情報提供者側の知識やスキルを高めるために2005年1月23日～2017年7月2日までの12年（2011年を除く）間に計37回にわたり開催しました。戸田理事長と理事の皆で、どんな研修会にしたらよいかと話あいながら担当者を決め研修会を行いました。研修会の最期に参加者の方々と共に身近な課題について意見交換できたことは終わったあとの充実感につながりました。

2005年から2010年までは、年に4回程度開催し、会員同士がそれぞれ調べた保健的食品について発表しあいました。戸田理事長から調べるポイントを示していただき、どうにかまとめ上げて研修会に臨みました。

受け身ではなく自分たちで勉強し発表するという自分たちのための研修会でした。また、外部の方の講演も聞きたいという声があがり、食品を取り巻く分野の著名な講師をお招きして、社会的な課題をおおいにディスカッションしました。震災の年は開催できず、2012年は4回実施したものの、2013年～2015年は年に2回、2016年2017年は年の1回の開催となっています。参加者が集まらない状況もありましたが、他では聞けない有意義な研修会でした。

講師を務めた皆さま本当にありがとうございました。

富永敦子

主な研修会

		主なテーマ	講師
第1回	2005.1.23	食品と医薬品の相互作用 グレープフルーツコエンザイムQ10セント・ジョーズ・ワート	戸田紘子 金田早苗 及川雪子
第2回	2005.3.13	食品と医薬品の相互作用 ウコン納豆クロレラペプチド・アミノ酸	今野勇 富永敦子 戸田紘子
第10回	2006.9.23	【特別講演】 健康食品と安全情報 医療現場での健康食品への対応について 調査結果と東京都の取り組みについて	東京都福祉保健局健康安全室薬事監視課監視計画係 小澤康子
第19回	2009.2.15	保健的食品の生理活性を探る 糖尿病 健康障害に関する成分を探る 漢方薬・生薬・ハーブ類 話題の食品：ヒアルロン酸	鈴木洋子 今野勇 塩釜さふらん湯 田村博義 菊地尚子
第34回	2014.6.29	食品安全観点と健康食品 ～薬剤師が伝える健康食品情報とは？	国立医薬品食品衛生研究所安全情報部 畝山智香子

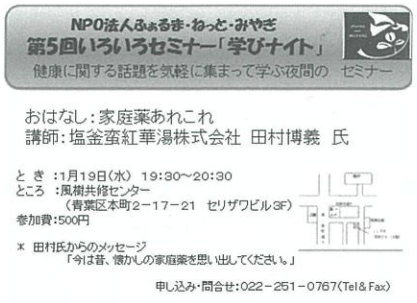
いろいろセミナー「学びナイト」

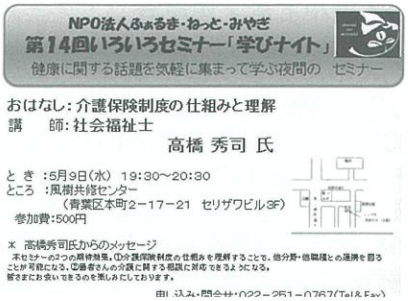
様々な分野で活躍をされている方々をおよびして、いろいろセミナー「学びナイト」とし、内容は健康に関する話題を気軽に集まって学ぶ夜間のセミナーということで企画しました。

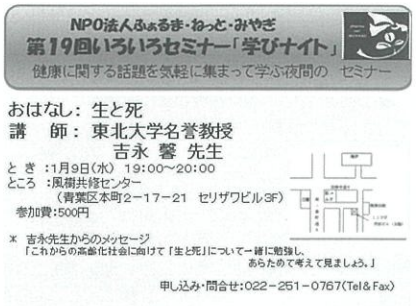
2010年からスタートして、2015年まで開催しました。

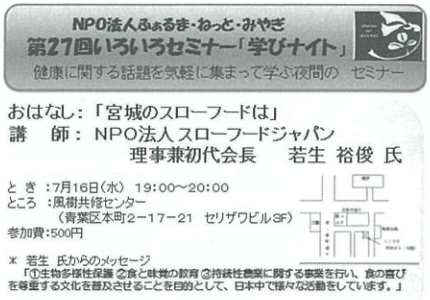
内容がとてもバラエティに富んでいて興味もあり、私たちがとても普通では話ができない方もいましたので、とてもよかったと思います。しかし、夜の7時スタートということもあって、なかなか参加人数が増えないことが残念でした。それでも回を重ねて30回程度にもなりましたので、皆さんありがとうございます。ご案内の一部をここに紹介しますので、参加された方々はあの時の「学びナイト」を思い出してください。

今野　勇









薬食研究会

薬食ビジランは、ふぁるま・ねっと・みやぎの調査研究部門です。特に健康食品に関する正しい知識を伝える、ふぁるま・ねっと・みやぎの活動の一つの柱でした。健康ブームのなか、トクホや機能性表示食品、サプリメントが次々に開発され、店頭を賑わしています。その宣伝には真しやかな美辞麗句が並び、購買意欲を駆り立てます。しかし、そこに本当に科学的証拠があるのかどうか、むしろ摂取しすぎや、体調によってはかえって健康被害が生じることがあるなどの情報を、市民講演会、ふぁるま・ねっと通信やホームページを通じて発信して来ました。

薬剤師は本来、薬のみならず、栄養や体の仕組みを学んで来ており、健康食品等の宣伝文句を科学的に評価するだけの力を有しています。そしてその科学的知識をもとに、市民に正しい情報を提供することは、市民に最も近い薬局薬剤師の重要な任務であるといえます。ふぁるま・ねっと・みやぎは、このような健康食品等の摂取について、市民講演会等で市民に注意を喚起するとともに、薬剤師の皆様にも科学的に評価することのの重要性をお伝えしてきました。同時に、学生など若い人たちを交えての研究会も実施するなど、長年にわたり、様々な啓蒙活動を続けて来たことは、ふぁるま・ねっと・みやぎの大きな成果の一つと考えています。　　平澤典保

助成・委託事業

PNMは財政面ではゼロからのスタートであったが、設立当初から3年間、県の「みやぎNPO夢ファンド」のスタートアップ支援を受け、順調に活動をスタートさせることができました。その後もほぼ毎年委託金や助成金の交付に与えることができたことは幸いなことでした。

みやぎNPO夢ファンド

平成17年度助成事業みやぎNPO夢ファンド（3）スタートアップ支援プログラム
　医薬品と保健的食品の適切な使用を支援するための出前講座の効果的実施冊子作成

平成18年度みやぎNPO夢ファンド（A）人材育成支援プログラム
　医薬品と保健的食品の適切な使用を支援するための出前講座担当講師の養成

平成19年度助成事業みやぎNPO夢ファンド（B）スタートアップ支援プログラム
　「薬食ビジラン・P-net]のための基盤整備事業
　保健的食品に関する実態調査

みやぎ県民大学自主企画講座

平成17年度みやぎ県民大学シリーズ" くすりと保健的食品"

（公財）一般用医薬品セルフメディケーション振興財団

平成22年度調査研究助成事業
　真のセルフメディケーション支援薬剤師の養成と新しい薬局モデル構築のための啓発事業

宮城県委託事業

平成26年度薬局・薬剤師を活用した健康情報拠点推進事業
　PNM10周年記念公開フェア第2部セルフメディケーション時代の薬屋さん

平成27年度薬局・薬剤師を活用した健康情報拠点推進事業
　村田町における地域包括ケアシステム構築に向けた多職種連携の試み

戸田紘子

アンケート調査

PNMでは15年間にさまざまなアンケート調査を実施し、状況の把握や活動への反映、そして行政へのフィードバックをおこなってきました。主なものは以下の通り。

- 日本薬学会市民フォーラム参加者（2004年11月）
- ふぁるま・ねっと・みやぎスキルアップ研修会参加者（2005年1月、3月）
- みやぎ県民大学受講生（2005年10月）
- 健康食品等メーカー担当責任者（2007年1月）
- ふぁるま・ねっと・みやぎスキルアップ研修会（2007年9月）
- ふぁるま・ねっと・みやぎ保健的食品調査参加者（2007年10月）
- ふぁるま・ねっと・・薬剤みやぎ公開フェア '07参加者（2007年11月）
- 仙台市内医師（病院・診療所内科医師200名）
- 薬剤師（薬局・薬店管理薬剤師100名）（2007年）
- セルフメディケーションについての意識調査は4つの対照群に対して実施した（2010年）
  - ①一般生活者に対してのアンケート（薬と健康のつどいに参加した108名）
  - ②管理薬剤師に対してのアンケート（仙台市青葉区99店舗）
  - ③薬局開設者に対してのアンケート（仙台市青葉区99店舗（㈪と同じ））
  - ④薬局開設者でかつ管理薬剤師に対してのアンケート（仙台市青葉区および太白区40店舗）
- 薬学生アンケート（2013,2014年）
- 設立10周年記念公開フェアへの参加者（2015年2月）

戸田紘子

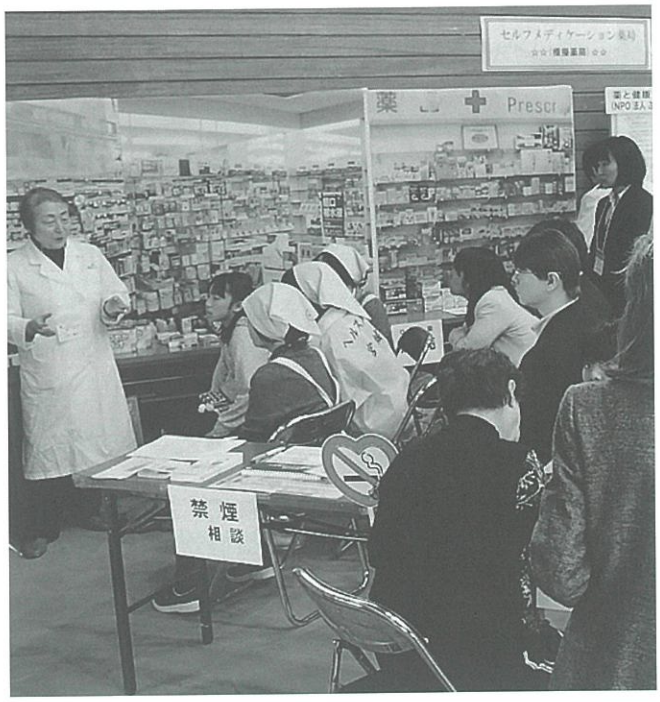
地域連携イベント ・・・村田町「健康ふくし祭INむらた」との連携

H27年度薬局・薬剤師を活用した健康情報拠点推進事業（宮城県委託事業）に取り組みました。事業は、村田町における地域包括ケアシステム構築に向けた多職種連携の試みとして、「健康ふくし祭INむらた」で「地域の健康情報拠点型薬局モデル」のブースを設置しました。体験型イベントとして、調剤（模擬）、OTC薬販売（模擬）、薬と健康の相談、在宅医療の相談、健康指標の測定を行いました。禁煙のきっかけ作りとしてスモーカライザーによる呼気中CO濃度のチェックやクイズ「健康食品うそ、ほんと!」も好評でした。

当法人の役割は、あくまでも「きっかけ作り」として動き始め、村田町の保健センター・保健福祉課の職員の方々の協力を得られました。しかし現地の薬局・薬剤師（薬剤師会）との協働を考えていましたが、町内の薬局・薬剤師の意識は高くなく、やっと一薬局の参加によってようやく形ができたことをよく覚えています。三年後の現在では、健康イベントは花盛りです。調剤報酬改定が後押しする形で薬剤師も薬局を飛び出して活動するようになりました。薬や健康を専門に扱う薬剤師が地域のイベントに参加したり、講演を行ったりすることで、地域の人々に正しい薬や健康食品の情報提供していくことは薬局・薬剤師の重要な社会的役割のひとつになりつつあります。

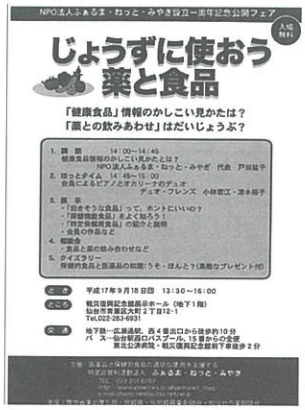
それでも、「セルフメディケーション」の言葉自体もまだ国民には認知度が低く、啓蒙活動が必要です。健康サポート薬局の形が厚生労働省より提言されました。国民にとって必要とされる薬局の形を模索する日々です。

庄子郁子



周年記念イベント ・・・テーマは、健康～セルフメディケーション

PNMの大きな役割は地域に対する情報発信です。通常時は出前講座などの講演活動で医薬品や保健的食品についての正しい情報をお伝えしてきましたが、1周年、3周年、5周年、7周年、10周年そして15年目にはそのときどきのテーマを掲げて、大きな会場に市民の皆様をお迎えしたイベントを開催しました。



1周年

3周年

5周年

7周年

10周年

15周年

＊1周年記念公開フェア：
　じょうずに使おう薬と食品
　　平成17年9月18日
　　仙台市戦災復興記念館
＊3周年記念公開フェア：健康食品うそ・ほんと
　　平成19年11月10日
　　仙台市戦災復興記念館
＊5周年記念の催し：
　・健康食品健康被害電話相談
　・知って得する健康リレーセミナー
　・薬と健康食品相談会
　　平成21年9月26～27日
　　仙台市戦災復興記念館他
＊7周年記念公開フェア：健康に生きるために
　　平成23年10月30日
　　せんだいメディアテーク
＊10周年記念公開フェア：
　　セルフメディケーション時代を上手に生きる
　　平成27年2月8日
　　仙台市戦災復興記念館
＊15年記念のつどい：
　ふぁるま・ねっと・みやぎからの贈りもの
　　平成31年1月6日
　　東北電力グリーンプラザ「アクアホール」

戸田紘子

◎PNM設立7周年記念事業の思い出

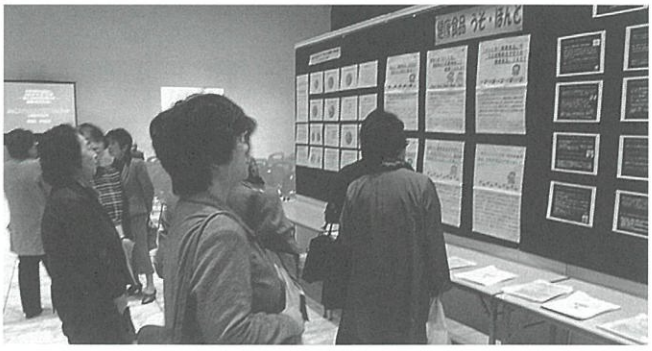
未曾有の大災害、東日本大震災から8年が経とうとしている2019年、「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の解散をとても残念に思うと共に、15年もの間、セルフメディケーションに関する情報を世間に発信され続けてきた功績を偉大に感じております。

2011年10月、PNM設立7周年記念事業に参加させていただきました。災害の起こった年でもあり、セルフメディケーションの大切さを感じている時期でした。そこで行なわれた公開フェア「健康に生きるために」をテーマとして開催した記憶がございます。なぜ、セルメディケーションを一人ひとりが行う必要があるのか、これからの超高齢化社会に向けた問題点や解決策に対して興味を持ってもらうために重要な会であったと思います。特別講演として「いのちの不思議と尊厳」のテーマで、「死」について考えることができました。また、セルフメディケー

ションの大事な要素である「健康とお金のはなし」をファイナンシャル・プランナーの先生よりご講演いただきました。現在、国策として進めているセルフメディケーション推進のためのスイッチOTC薬控除があります。この対象となる医薬品はスイッチOTCの成分であり、国民にOTC薬を使用したセルフメディケーションを推進しようとする意図は分かります。一方で、メディアにより宣伝されるものは健康食品が多く認知度も高いです。健康食品の中には、医薬品との相互作用や健康へ悪影響をもたらすものも多く、軽視することは出来ません。そのような健康食品の有効性と危険性を世間に発信されつづけてきたPNMの活動は、非常に重要な功績であったと思えます。

薬学部のカリキュラムにおいてもセルフメディケーションの講義が開講されています。今後、さらにセルフメディケーションの重要性が認知され、薬剤師の需要も増えてくると推測されます。

PNMでの経験を活かし、後世の育成に励んでいく所存です。　　鈴木裕之

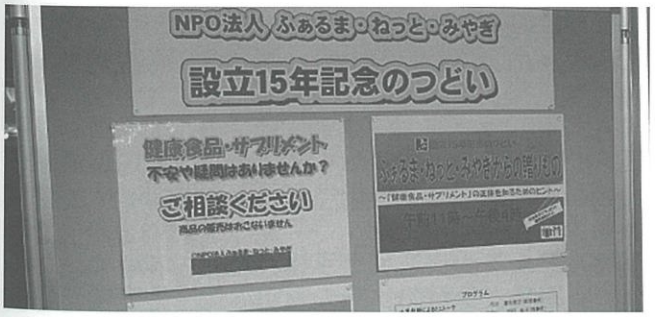


◎15年記念のつどいを開催して

2019年1月6日、設立15年記念のつどいとして「ふぁるま・ねっと・みやぎからの贈りもの」～「健康食品・サプリメント」の正体を知るためのヒント～を東北電力グリーンプラザにて開催しました。薬剤師によるミニトーク（「薬局の利用の仕方」「漢方薬とは?」「薬学の面白さ」「薬用植物」「睡眠と睡眠薬」）と戸田理事長の記念講演（健康食品・サプリメントで健康被害を起こさないための情報とヒント）が行われました。他に情報資料、ふぁるまねっとみやぎ15年間の歩みの展示があり、相談ブースでは、医薬品・健康食品・禁煙・健康一般について薬剤師が答えていました。

設立15年記念のつどいを迎えるにあたり、記念冊子「ふぁるま・ねっと・みやぎからの贈もの別冊ほんとに本当?（Q&A）」を作成し来場者に配布しました。健康食品（素材）・医薬品、医薬部外品・生活用品について不適切な情報に惑わされないように願って作られたものです。

人は高齢になり、老化は必然であり受け入れていかなければならないものです。医薬品を服用しながら、より健康を願い迷いながらもサプリメント・健康食品を取り入れようとする姿があります。日頃から不安を抱えている市民の方々がより正確な情報を求め多くの方々が集まりました。トクホ・機能性表示食品など制度の変更もあります。今後も薬剤師の立場から正しい情報を発信し、多くの方に伝え続ける必要性を切に感じました。　　庄子郁子



薬剤師等対象セミナー

◎OTC薬学セミナー（2010～2017）

PNMの活動を支える柱として、エビデンスに基づいた情報発信を担う薬剤師をはじめとする医療従事者の知識やスキルの向上があります。特にセルフメディケーション推進の視点から言えば、薬剤師も登録販売者もOTC薬や保健的食品についてきちんと学ぶ必要がありました。

そこで、2010～2017年の7年間、薬剤師および登録販売者を対象にした「OTC薬学セミナー」を1日4～6時間、延べ日数48日実施しました。その一部は登録販売者外部研修を兼ねたものです。

薬剤師および登録販売者を対象としたOTC薬学セミナー（兼登録販売者継続研修）（平成28年）

研修時間	研修内容（前編）	研修内容（後編）
10:00-12:00	1-1薬を安全に用いるために 1-2変更等を含む関連法（2時間）	5胃腸薬周辺の薬（2時間）
昼休み50分		
12:50-14:50	2かぜ症状周辺の薬（1）（2時間）	6皮膚外用薬周辺の薬（1）（2時間）
休憩10分		
15:00-17:00	3かぜ症状周辺の薬（2） 4アレルギーが関与する疾病と薬（2時間）	7皮膚外用薬周辺の薬（2）（1時間） 8ロールプレイ（1時間）

しかし、本セミナーへの参加者（とくに薬剤師）は極端に少なかったのが現状です。薬剤師なら馴染みの医薬品成分からなるOTC薬品への偏見（医療用医薬品より劣っている、簡単に対応できる、処方薬の視点でしか見ないなど）や無関心など、まだまだセルフメディケーションへの意識は低いと思われたが、8年後の現在ではかかりつけ薬局への移行がせかされ、この分野への取り組みで苦心しているのではないだろうか。2013年に全薬剤師がOTC薬学セミナーに参加した薬局は、その後セルフメディケーション対応の素晴らしい薬局を展開している。

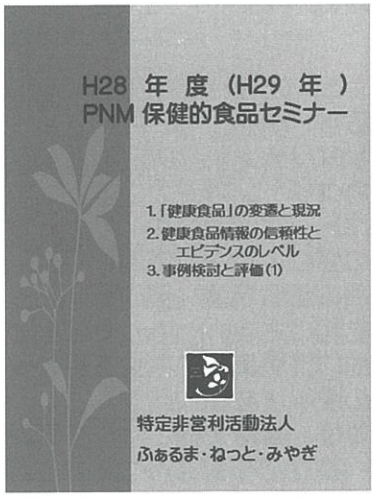
戸田紘子

◎保健的食品セミナー（2017）

医療の領域にも、健康によいと期待して用いられている多種多様な食品が入り込んでいる。

これらの食品に関する情報や商品の供給・利用は、営利目的そのものから、民間療法、統合医療・代替医療までの広範囲にわたり、しばしば健康被害や薬機法違反が報じられている。このような状況下で、薬剤師等は薬の専門家として確かな医薬品情報の提供はもちろんのこと、健康食品についても否応なしに「科学的な裏付けのある適切な情報提供」が求められている。薬と食品の相互作用や、食品の摂取に関わる服薬指導のあり方についての資料の充実が望まれており、薬剤師等が緊急に研修すべき課題ではないかと思われる。ふぁるま・ねっと・みやぎが13年間に蓄積してきた資料を基に専門家としての知識を共有したいと考え、本セミナーを企画しました。

第1回　4月9日（日）
「健康食品」の変遷と現況
・歴史・日本の制度と区分
・現状を巡る問題
健康食品情報の信頼性とエビデンスのレベル
・食品としての安全性と有効性
・エビデンスのレベルと広告
・消費者の誤認と被害
事例検討と評価（1）検討会
第2回　5月14日（日）
薬と食品の相互作用
・相互作用の起こりうる素材の把握
・食品における表示
専門家が伝える健康食品情報
・専門家としての立ち位置
・専門家としてのファクトチェック
・事実をどう伝えるか
事例検討と評価（2）検討会
・服薬指導における情報提供
・持参薬チェック時における指導



2日間に亘り8時間の薬剤師を対象としたプログラムであったが、参加者は4名という惨状でした。

いわゆる健康食品の歯止めのない蔓延ぶりは、高齢化社会において深刻な問題となっているが、薬剤師も避けては通れない。服薬指導の場ではきっちりした情報提供が必要である。自覚して学んで欲しいと切に思う。

戸田紘子

日本薬剤師会学術大会　・・・全国の薬剤師へ発信

PNMの活動の中からえられた知見や成果を、日本薬剤師会学術大会において9回の発表をおこなった（第38回（2005）～第49回（2016）。発表を振り返ると、あらためて活動の変遷が分かり、保健的食品情報～禁煙支援～セルフメディケーション（SM）支援など先駆的な活動に取り組んできたことが見て取れる。

＊第38回日本薬剤師会学術大会（2005/10/10）
広島国際会議場
「医薬品と保健的食品の適切な使用を支援するためのNPO法人としての活動」戸田紘子

＊第39回日本薬剤師会学術大会（2006/10/8,9）
福井フェニックス・プラザ
・医薬品と保健的食品の適切な使用を支援するためのNPO法人としての活動（2）戸田紘子
・医薬品と保健的食品の適切な使用を支援するためのNPO法人としての活動（3）金田早苗

＊第40回日本薬剤師会学術大会（2007/10/7）
神戸国際展示場
薬剤師向けの「食と健康に関する研修会」を開催して富永敦子

＊第42回日本薬剤師会学術大会（2009/10/11、12）
大津市
（口頭発表）ここまでできる!ドラッグコーナー

における禁煙指導戸田紘子
（分科会）禁煙支援～今、薬剤師が行うべきこと～戸田紘子
（ランチョンセミナー）ドラッグストアは「禁煙支援の宝庫」戸田紘子

＊第43回日本薬剤師会学術大会（2009/10/11,12）長野市
〈ポスター〉医薬品副作用被害救済制度における薬剤師の役割～相談事例から考える～
金田早苗
〈分科会〉「健康食品」の適正使用のために薬剤師はどうかかわるか戸田紘子

＊第45回日本薬剤師会学術大会（2012/10/7）浜松市
SM推進についての考察ー薬局におけるOTC薬提供についての開設者・管理薬剤師・患者の意識と実態調査から金田早苗

＊第46回日本薬剤師会学術大会（2013/09/22、23）大阪市
・SMについての薬学生教育～薬学生の一般用医薬品購入調査を通して～富永敦子
・薬剤師による禁煙薬物治療の問題点とさらなる取り組み～オール薬剤師禁煙ひと声運動キャンペーンを呼びかけて～戸田紘子

＊第48回日本薬剤師会学術大会（2015/11/22、23）鹿児島市
真のSM支援薬局を目指して～10年間の模索と模擬店舗「セルフメディケーション薬局」の展開～
金田早苗

＊第49回日本薬剤師会学術大会（2016/10/09、10）名古屋市
真のSM支援薬局を目指して（第2報）～地域包括ケアシステム構築に向けた多職種連携の試み～櫻井裕子　戸田紘子

〈参加報告〉

◎第48回（2015）

2015年の日本薬剤師会学術大会は、11月22日～23日に鹿児島市で開催されました。私は、ふぁるま・ねっと・みやぎを代表して、「真のセルフメディケーション（SM）支援薬局を目指して～10年間の模索と模擬店舗の展開～」という演題で、ふぁるま・ねっと・みやぎの10年間の活動をポスターで発表してきました。

10年間のSM推進支援のための活動を紹介し、2015年2月に行われた設立10周年の記念事業の模擬店舗「セルフメディケーション薬局」での健康推進拠点となり得る薬局の姿と薬剤師の想いを模擬的に表現した企画を紹介しました。参加者のアンケートの結果も示し、企画に参加し薬剤師の説明の前後で、薬剤師や薬局の役割の認識の変化も報告しました。

ポスターを見にきた方は多くはありませんでしたが、みなさんが、ふぁるま・ねっと・みやぎの活動に共感してくれました。質疑の中でSM支援の重要性について意見交換することができました。

国民の主体的な健康の保持増進を積極的に支援する「健康サポート薬局」が政府から打ち出されています。地域で真のSM支援薬局を目指す活動は、今後もさらに重要になってくると思います。　金田早苗

◎第49回（2016）

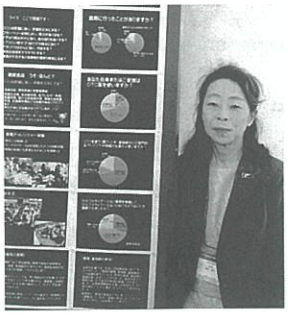
2016年の日本薬剤師会学術大会は、10月9日～10日に名古屋市で開催されました。「真のセルフメディケーション（SM）支援薬局を目指して（第二弾）～地域包括ケアシステム構築に向けた多職種連携のこころみ～」と題して、宮城県南部に位置する村田町の健康イベントに参加する形で、地域の薬局および地域包括支援センター等との連携に至る挑戦をポスター発表の形で報告した。

国が進めるSMにおいて薬剤師の関与が欠かせないことを多職種の方々に周知することが課題となっていた中で、宮城県の委託を受けて実施された取り組みでした。今までも真のSM支援薬局を目指し支援薬剤師の養成と新しい薬局モデル構築のための研究をアンケート調査・シンポジウム・セミナー・出前出張講座等を通して取り組んでまいりましたが今回は、村田町の「健康祭り」の会場内に理想の「モデル薬局」を設置調剤・OTC薬販売・相談・各種健康指標の測定実施を行いました。

実施準備過程での保健福祉課職員との打ち合わせや町内薬局の参加、当日も両者の協力があり構築の意義を深めた結果の報告となりました。ここでは、住民及び多職種が抱える医薬品・健康食品への疑問点へ正しい情報提供（健康食品のウソほんと）、薬局の正しい利用法を伝える法人ふぁるまねっとの取り組みを実施しております。

住民の健康維持、及び病気の予防については適切な食生活と一般薬を用いた軽度の治療により、自らの健康を守ることが必要とされています。SMが適切に行われるために正しい知識や情報を薬剤師は薬局の店頭において提供し、相談指導に当たっています。しかし時に行政の力が必要であったり、包括支援センターの協力なくては、継続できない情報提供もあります。限界がある中生活の場に近いところでの普及、啓蒙活動で補完することが求められるなか村田町イベント参加は、理解を深めることにつながった。

ポスター発表では、不確かな情報に目を向け健康被害、ひいては経済被害が防げるグループの活動報告、模擬薬局の在り方、連携の在り方に薬剤師の興味を引きどうしたらこのようなイベントを持てるのか?活動についての反響の質問も受けました。健康被害を起こさず安全性に関する正しい情報がこれからも重要であることを理解する薬剤師が多いことも参加より感じたことでした。今後も真のSMを目指し行動する必要性を感じアピールして行きたいと思っております。　櫻井裕子



報道記事

人々の健康や生活に関係深い分野でありながら、情報発信のツールを持ち合わせない新設のNPO法人にとっては、その存在や活動を世間に伝えることが大きなネックでした。そんな折、新生NPOの芽吹きに目を向けてくださったマスメディアの記者さんがおられました。当時河北新報社生活文化部藤田記者と薬事日報社編集局池田記者です。両記者にはその後の「あゆみ」を折にふれて記事にしていただき、PNMの活動がひろがりました。最初から最後まで見届けてくださいましたことに感謝いたします。

戸田紘子

薬学生に対する教育の一環として

◎東北大学薬学部での講義

10年ほど前から現在まで「NPO法人ふぁるま・ねっと・みやぎ」富永に、東北大学の3年生へ講義を依頼されています。当初は戸田理事長も非常勤講師として講義を受け持っていましたが、戸田理事長が非常勤講師を辞退されてからは、富永が一コマ90分で講義を行っています。薬学部の学生すなわち今後の薬学を背負うであろう人材に、講義するチャンスをいただいていることに東北大学名誉教授の坂本先生をはじめ平澤教授に感謝を表したい。そして講義を聞いてくれた学生たちに、ぜひ日常生活をサポートする薬剤師の存在を忘れないでほしいと願っています。そして研究者を目指す学生には、真摯に研究に取り組んでいただき、最終的には患者や一般人が使うことを想像していただきたいと思います。

私のテーマは「地域医療における薬剤師の役割」とし、医薬分業の歴史、調剤、在宅訪問、セルフメディケーション、災害時の薬剤師の対応、学校薬剤師のことなど地域で活躍する薬剤師についての総論的な講義を行っています。東北大学の薬学部は、薬剤師コースは80名中20名で、60名は研究へと進みます。しかし、研究を志すにしても最終的に薬や健康食品が患者へ渡される状況について知識を持っていただきたいと考えています。10年前に講義を行った頃は「薬局薬剤師のことを知らない」と答える学生が多かったと戸田理事長は話されていました。現在は医薬分業は当たり前になりました。しかし「薬局薬剤師の仕事は調剤して渡す仕事」として社会には認識されているようです。学生には特に患者や住民のための様々な取り組みをしていることは知られていないようです。講義のあとに書いた学生のレポートが毎年送られてきます。それを読むと、「地域の薬剤師の仕事はやりがいがある」と感じてくれている学生が多いことがわかります。これからの薬局業務は患者（住民）のためになることを実行していくことが求められていますので、講義が将来につながれれば幸いです。

富永敦子

◎東北薬科大学生（希望者）に対するOTC薬学講義（2013,2014）

薬学を志し、学ぶ学生は、将来どのようなコースを選択するにしても、医薬品を介して世の中に関わることになる。現在では、医療用の医薬品の多くが保険薬局から、一般用医薬品（OTC医薬品）の大部分がドラッグストアから提供されているが、薬学生が実際のOTC医薬品供給の現場について学ぶ機会は、ほとんどないと思われる。医薬品は、常に使用する人の状況を視野に入れて供給されるべきであり、なるべく早い段階で「医薬品の世界」に接することは大変意義深いことと考え、OTC医薬品の基礎と現場での実際をふまえて、実践的な視点からOTC薬学を学ぶ講義を実施した。

戸田紘子

◎薬学生によるOTC医薬品購入体験と調査（2013、2014）

薬学生への意識調査などにより,薬学生のOTC医薬品やセルフメディケーションへの関心が高く、将来の職業としてOTC医薬品に関わりたいという希望も多いことが分かった。しかし、薬学生が実際にOTC薬剤師や販売現場に接することはきわめて少ない状況にある。平成25年度の事業として、薬局・薬店を訪問し、実際のOTC医薬品や購入するために必要な情報がどのように提供されているかなどを確認し、薬剤師の接客状況やあるべき姿を学んでもらった。アンケートや報告会での発表からはOTC薬販売の現場に対して新たな視点や考えが生まれたようであった。

富永敦子

役員から

【理事】

ふぁるま・ねっと・みやぎの時間

戸田紘子理事長とは宮城県薬剤師会の広報部からのお付き合いです。1999年頃からでしょうか。右も左もわからなかった私を「富永さん、富永さん」と声をかけていただき、戸田先生とは宮城県薬剤師会でいろいろと活動を共にしました。戸田先生のバイタリティあふれる行動に一生懸命に付いていきました。強い信念を持って会議で発言し次から次へと実行される戸田先生はすごいと尊敬していました。当時様々な健康食品が発売され、宣伝文句のままに信じて使用する方がたくさんいました。薬局でもエビデンスなど関係なく販売しているところもありました。保険薬局に勤務していた私は患者さんから「使用してよいでしょうか」と質問されることが多く、実態について知りたいと思っていたところに、戸田先生から健康食品問題について有志が集まって勉強する会を立ち上げると聞き、参加を表明しました。のちにNPO法人となりました。NPO法人となるといろいろと決まりがありますが、戸田先生はご自分で調べてきちんと形をつくってくれて私たちが活動しやすいようにしてくれていました。また、立ち上げ数年は研究助成の申請を行い助成金の当選を果たすことができ、様々な活動を行うことができました。自分たちで調べて発表するスキルアップ研修会やイベントではいろいろな方からたくさんの真実を教えていただきました。日常の業務にはない魅力を感じて活動した年月でした。

東日本大震災後薬剤師会での活動が落ち着いたころ、ふぁるま・ねっと・みやぎでイベントを行ってみたらどうだろうと思い企画しました。手ごたえもありました。その後、私自身の仕事内容も変わり忙しくなっていきました。本当は私が戸田理事長を支えていくことができればよかったのですが、忙しい日々の暮らしに全く余裕がなく、定期的に行われる理事会出席のみ参加となり、申し訳なかったと思います。NPO法人としての活動も支えるメンバーが少なくなりましたので、残念ではありますが、解散することにしました。

真実は何かを考えること、真実を伝えること、薬剤師としての正しいことを行っているのかと自問して行動すること、そのような考え方は、ふぁるま・ねっと・みやぎの精神だと思っています。私は一緒に活動できなくなりますが、教えていただいた教訓はずっと守ります。そして機会があれば協力していきたいと思います。15年間の間にいろいろと教えていただいた皆様、活動を共にしてくれた皆様、本当にありがとうございました。戸田理事長のますますのご活躍を祈念します。　富永敦子（副理事長）

ふぁるま・ねっと・みやぎ15年に向けて

薬と違って保健的食品は食品表示が消費者にとって、安全の確保、品質の選択や健康に関する大切な情報になります。この15年の間に食品に関する食品偽装や消費者に対する問題が多くありました。また、消費者庁の発足により、2015年には食品の表示に関する法律が一元化された「食品表示法」が施行され、栄養成分表示の義務化により、分かりやすくなったように思われます。

また、同時に「機能性表示食品」制度がスタートし、これで国が制度化した保健機能食品は「栄養機能食品」「特定保健用食品」と合わせると3種類となり、消費者には理解するのがより複雑になっています。市場では機能性を表示した食品として急増していますが、課題も指摘されています。2018年にガイドラインが改訂され、詳細な分析手法の開示が求められることとなりました。私たちが保健的食品でも指摘してきたことでもあります。

いよいよセルフディケーションがあたりまえに様々な選択肢もある中で、自分の健康は自分で守るということになってきました。ふぁるま・ねっと・みやぎ15年のあゆみに向けて、さらに食品の表示制度が消費者のために改善されることを期待したいところです。　今野　勇

理事からの一言

病院で働いていたころは、OTC薬はもちろん、健康食品には全く関心はなく、病院で処方される医薬品があればそれでよいと思っていました。保険薬局で働き始め、患者さんが健康食品に興味を持っていること、実際に摂取していることも多いことに気づきました。また、セルフメディケーション支援の意義も理解できるようになってきました。そんなころに、宮城県薬剤師会で、「健康日本21」への取り組みを行うということで、戸田理事長とお付き合いすることになりました。

その後、一緒に学習を進め、ふぁるま・ねっと・みやぎを立ち上げました。活動を通じて、医薬品や健康食品に関して、地域の方や薬剤師への様々な情報提供を行いながら、自分自身もたくさんのことを学ぶことができました。ふぁるま・ねっと・みやぎで活動できたことは、大変貴重な経験になったと思います。一緒に活動してきた皆様、ありがとうございました。

金田早苗

ふぁるま・ねっと・みやぎに参加して

私がふぁるま・ねっと・みやぎに参加したのは、東北大学名誉教授の坂本尚夫先生からの声がけがきっかけで、同期の富永敦子さんがその中心メンバーの一人でもあったためでした。これまで、私は薬剤師としての経験は全くなく、薬剤師の調剤以外の実際の活動についてはほとんど理解していませんでした。ふぁるま・ねっと・みやぎでのいろいろなイベントに参加するようになり、薬局薬剤師として活躍されている先生方とお話しする機会を得て大変良い経験になりました。また、薬食研究会を通じて、健康食品やサプリメントなどの健康ブームの陰にある安全性の問題を再認識し、またセルフメディケーションの推進における現実的な問題と薬剤師の使命などについて、市民と薬剤師との関わり合いのあるべき姿を学びました。

IoT等の情報科学が急速に進歩していく中、大学と地域薬局がもっと連携していけば、新しい医療の構築が加速していくと考えています。ふぁるま・ねっと・みやぎでの経験をさらに活かして、架け橋

となる活動ができればと思っています。平澤典保

ふぁるま・ねっと・みやぎの15年

「ふぁるま・ねっと・みやぎ」設立時、一会員として始まりました。その当時、健康食品・サプリメントについて患者より質問があっても、明確に回答できずにいましたので、とても勉強になりました。その後、企画委員を経て理事として、仕事させていただきました。その中でも、PNM設立10周年記念のイベントを通じて、「薬局」の形を模索していく上で、学生と一緒に活動することが出来たことが一番の思い出です。食品制度が変化する中で、正しい情報を理解してもらうことの大切さを実感しています。これからも、一人でも多くの方に健康・医薬品・サプリメントの正確な情報を伝えていきたいと思います。15年間、戸田先生はじめ、多くの方に支えられNPO活動ができました。感謝申し上げます。

庄子郁子

【監事】
「NPO法人ふぁるま・ねっと・みやぎ」への参加を通じて

2002年（平成14年）7月研究会「薬食研」の立ち上げを経由して、平成16年（2004）特定非営利活動法人「ふぁるま・ねっと・みやぎ」が発足後盛会裡に展開している活動ぶりを聞き、（発足後しばらくしてからだと思いますが）一会員として参加しました。その後、平成25年（2013年）10月に監査役をお受けして、30年度任期途中に至りました。

各期を担当した会計担当理事の正確を期す働きにより、各年の会計的な監査は何らの疑問もなく完璧であり、会計的な監査役としては全く苦労がありませんでした。

特定非営利活動法人「ふぁるま・ねっと・みやぎ」の設立目的は医薬品及び健康食品の適切な使用を支援するというものです。

県の薬剤師会に短期間ながら参加した経験から、その活動は一般の市民たちを対象にした医薬品・健康食品などについての啓もう活動へと広がるにはかなり不十分ではないかと思っていました。

本会の設立に参加した方々が本会の設立目的に「医薬品及び健康食品の適切な使用を支援」の対象を広く一般の人々へと掲げたものと理解していました。

本会は15年の長きにわたり、小会員数ながら地味ながら持続的に、一般市民むけの活動の実績を積み上げてきたものと高く評価されるのではないかと思っています。

出前講座、公開イベント、ホームページ（情報発信）を通じて、その目的を発揮してきましたが、会員のご努力はさることながら、理事長戸田紘子氏の間断なき尽力なくしては、遂行できなかったことは会員ひとしく認めるところでありましょう。

最近,仙台市薬剤師会が、市民を対象にした正しい薬の知識普及を目的の会合を開催していることを知り,本会こそが、一般市民むけの活動の“さきがけ”として歩んで来たのではないかと改めて思い直してもいます。

近年では、設立の目的を継承すると期待された若手会員の増加もみられず、会員の多くはそれぞれの職場で現役として職務に専念する必要性があったのでしょう。それ故に、NPO活動は時間的にも余裕がなく片手間にならざる得ない事情が、法人としての本会の解散へ繋がったかとも思えます。

当方は、薬科大学でもっぱら薬学の基礎的分野の教育に携わってきましたが、職能としての薬剤師教育を志向したものでなかった反省もあり、職場を異にした薬剤師会員同士の（盛んな議論を踏まえた）自己研鑽・学習を通じ、著しい進歩をしめす最新の薬物治療について、アップデートな情報・知識を得たいものだとも期待してきました。しかし、その意図は本会の主たる目的には沿わなかったのかもしれません。そのような学習会の機会はほとんど得られなかったように思えます。会員の一人としても、会の運営にどれだけお役に立ったものかしらと忸怩たるものがあります。

この度、本会は、法人格の衣を脱ぎ棄て、任意団体として出発するという。具体的な活動がどんなふうに展開するのか思い描けないでいます。従来の活動の自由度がさらに広がる（?）ことを期待でしたいものです。従来の会の活動へのさらなる発展的な一過程なのであればまことに喜ばしいことです。

佐藤　進

ふぁるま・ねっと・みやぎの思い出

1964年東京オリンピックも終わり、東京から転任で仙台駅に降り立った私を迎えてくれたのは、2代目正宗の騎馬像が八木山に向かって進む台車の姿でした。自然と文化度の高さが気に入りそのまま仙台の人になっていました。科研製薬仙台支店の基礎作りの任を受けてのスタートでもありました。

あれから55年、今は広瀬側沿いの終の住処に静かに暮らしております。訳あって30年の勤務後退職し、数軒の調剤薬局を経営しておりましたが、多賀城店エリアの市議会議長さんと懇意になりまして、当時サプリメント熱が巷でも薬局待合室でも盛んになり、老後の健康意欲が高齢層で高まっているので薬との関連や違いを話して欲しいと申し入れがございました。その頃戸田先生が活発に活動していらっしゃることを知り、入会していろいろな資料を戴き実施いたしました。結果は皆さんの関心の高さに驚きましたので少しでもお役に立てればと思い、所属しておりました法人会（経営者の会）に戸田先生に講演をお願いしたり、シニアサロンで私がお話しさせていただいたりして、多岐に亘り勉強させて貰いました。その内、柏木の老壮大学から直にサプリと薬の関連について話を聞きたいとの申し入れがあったりして、だ先生から色々アドバイスを受け好評に終了したのですが、その後のパートIIのお話に対応できないまま現在に至ってしまったことを悔いております。今やサントリー社を筆頭に4千億円市場が高齢化と相俟ってどうなるかが心配です。末尾に無力な会員であったことをお詫びいたします。

吉澤順一

お疲れさま!!…頑張りました!

薬食研「まっしゅる～む」のあゆみ

＊＊＊発足(2002. 7.)～　2003. 12＊＊＊

2002.7.12　立ち上げ‥主旨と活動内容、すすめ方などを決める

＊ 名称の決定「　みやぎ・薬剤師・保健機能食品・健康食品研究会」
通称は薬食研「まっしゅる～む」

＊県薬会館(昼の部、7名) と　婦人会館(夜の部、8名)でスタート

＊定例会は毎月第3火曜日　(　毎月 県薬ニュースで案内　)
14:00～16:00　、　19:00～21:00

＊折り込みチラシ、雑誌、新聞等から得られる広告キャッチコピーや記事を持ち寄って分析、問題点の把握

2002.12　情報および商品の流通が多い「きのこ類」に対象を絞って情報収集およびデータ解析、評価に着手

＊手紙作戦‥‥主なきのこの研究者に手紙を出し、情報の提供を依頼

＊各自入手した資料の交換

＊評価基準の検討、確認‥薬剤師として許容できるレベル

2003.2　夜の部の会場変更‥東邦薬品様のご厚意で東北事務所に(2003.6 まで)

2003.6　朝日ウイルの矢萩氏の連載記事について、資料提供の依頼と、連載意図確認

2003.8　仙台市医師会　市民医学講座の講師　‥戸田

前身の「まっしゅる～む」のあゆみ

2004年6月　設立メンバー

2010年3月　本町分室開所祝い

2011年10月　7周年記念イベントスタッフ

2015年2月 10周年記念イベントスタッフ

2019年1月　15周年記念イベントスタッフ

※イラスト提供　TOMOCO

15年のあゆみ
設立から解散まで (2004.10.14～2019.5.31)

発行：特定非営利活動法人ふぁるま・ねっと・みやぎ
発行日：2019年5月12日
URL：http://www.pharm-nm.org/
印刷・編集　株式会社セイトウ社